

現代河川空間デザインの傾向から考える風景の実存的意味

中井 祐¹

¹ 正会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1)
E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp

本論は、日本における 1970 年頃以降の河川整備、とくに評価の高いデザイン事例の傾向をふまえたうえで、そこから示唆される風景の実存的意味について、近代主観主義的風景観と存在論的風景観という仮説的枠組みを用いて、考察を試みるものである。

Key Words: moderan riverscape design, meaning of landscape, existentialism

1. はじめに

風景とはなにか。風景は、わたしたちの生の諸局面にいかなる意味を与えているのか。本稿の根底にある問いである。

本稿では、具体例として現代の水辺デザインの傾向に着目し、そこから示唆される風景の実存的意味について、近代主観主義的風景観と存在論的風景観という仮説的枠組みを提示しながら、考察を試みるものである。

2. 近代主観主義的風景観と存在論的風景観

風景をデザインするとき、われわれは当然ながら「良い風景」の創出を目指そうとする。「良い」の定義はさまざまであろうが、そのデザイン行為は、おおむね、次のふたつのベクトルを内包しているように思われる。

第一は、対象の造形によって美的で快適な空間や眺めを創出しようとするベクトルであり、目に見えている環境が良い環境として認識されるよう、技術で改良しようとする。第二のベクトルは、コミュニティや生態システムなど、目に見えている環境の背後にあってその環境の形成を司る見えないもの、すなわち環境を形成する主体に働きかけ、その作用を活性化しようとする。もちろんこれらは、かならずしも相互独立ではないが、議論のために便宜的に分けておく。

このふたつのベクトルに思想的フレームを与えるために、哲学からのアナロジーを用いることとしたい。たとえば渡邊二郎は、芸術に関する哲学的考察のなかで、「近代主観主義的美学」と「存在論的美学」を、次のように対置する¹⁾。

「近代主観主義的美学」とは、美の成立根拠を、私たち人間の主観の心の在り方のうちに求め、人間側の何らかの「主観的条件」を整えば、そのとき美が感受されてき、こうして例えば芸術は、そうした主観的条件に基づく美の樹立を目指すものと看做す考え方を指す。一方、これに対し、「存在論的美学」とは、芸術作品が狙うのは、美ではなく存在の真実であり、そうした真実の世界の開示される場が芸術作品であり、そこには、主観を超えた、いわば「客観的」な存在の真実が輝き出ており、その輝きと現出の結果が単に美であるにすぎず、人は芸術において開示された真実の輝きの中に恍惚の忘我奪魂の状態で魅入られるのだとする考え方である。

渡邊は、芸術作品に接したときの感動や感銘はどこからくるのか、を論じようとする。同じように、風景に接したときの感動や感銘はどこからくるのか、という問いを前提におくなら、渡邊の二分法を先述したデザインのベクトルにあてはめることは、思考実験として有効であろうと思う。

第一のベクトルは、人間が「良い風景」と認識する一定の主観的条件を、対象の造形によって整えようとするという意味で「近代主観主義的風景観」に基礎をおく態度だ、と類比できよう。

一方で第二のベクトルはどうか、すこしたちいって考えていきたい。本稿の主たる関心は、この第二のベクトルが、「存在論的風景観」と言うべき風景の基本思想になりうるか、という点にある。

ここで、いったん哲学からのアナロジーを離れ、現代の水辺デザインの特徴と傾向を概観したのち、ふたたび抽象的な論に戻っていきたい。

3. 現代の水辺デザインの傾向²⁾

表 1 に、1970 年代から現在における水辺デザインの事例を、土木学会デザイン賞受賞作品に絞って（一の坂川を除く）概括した。「景観設計系」と「多自然系」は筆者の主観的印象に基づく相対的な区分で、前者は護岸の造形を直接的な手段としてオープンスペースを創出することにデザイン技術上の重心があり、後者は川の営力による河道内環境の形成と場の創出にデザイン技術上の重心がある、という分け方である（前章で述べたふたつのベクトルに意識的に対応させている）。

景観設計系は散発的で事例のひろがりがない。一方多自然系はコンスタントに事例が登場し、かつ内容も多様である。たとえば、多自然系の事例は多くが地域の川、住民の身のまわりの身近な川であり、整備内容も現場ごとの特色が感じられるが、景観設計系では太田川、斐伊川、阿武隈川、遠賀川、忠別川など、空間も流量も規模が大きくそのデザインの公共性が広域に及ぶ事例が大半で、デザイン技術のバラエティも少なく感じられる。また、各事例の設計趣旨説明や受賞理由を比較すると、景観設計系が概してデザイナーが空間を構築する意志を強調するのに対して、多自然系は、表現の差はあれ「川本来の姿」の重視を謳う傾向が強く見受けられる。

さて、多自然系（第二のベクトル）が川づくりの思想から風景の思想に昇華するためには、以下を問わねばならない。川の「本来の姿」とはなにか。渡邊の言葉を借りるなら「川という存在の真実」とはなにか。その「存在の真実性」は、風景の意味とどうつながっているのか。

4. アクチュアルな生と連動した風景論へ

上の問いに対する筆者の考察の蓄積は、まだ充分ではない。考察の要点を記し、ひとまず本稿を脱したい。

近代主観主義は、主体による客体のただしい認識、世界の客観的なありかたの認識を、つねに志向する。一方、主としてハイデガーに依拠する存在論的な立場においては、世界とは、認識される対象すなわち客体ではなく、わたしたちがいままさにそのなかにほうりこまれて生きている、生の実践の場である。わたしたちは与えられた、かつ限られたそれぞれの世界のなかで、他者や存在者（ものごと）とかかわり、生きる意味を見いだしてゆく。

川も、その世界のなかの存在者である。したがって「川という存在の真実」というとき、決して、どこかに唯一普遍の川の理想形（アイデア）がある、という近代主観主義的な意味に解してはならない。川という存在の真実は、世界内存在としてのわたしたちの生の真実から独立させて考えられない（川という現象のみを対象としてとりだして考えてはいけない）。なぜなら世界において

表 1 1970 年代～現在における水辺デザインの著名事例概括

景観設計系（第一のベクトル）	多自然系（第二のベクトル）
太田川基町環境護岸（1983）	一の坂川ホタル護岸（1974） いたち川（1982）
シビックデザイン導入検討委員会（1989-1992）	多自然型川づくり推進（1990）
浦安境川（1994） 津和野川（1996） 岸公園（1999） 阿武隈川渡利地区（2000）	子吉川二十六木地区（1995） [児ノ口公園（1995）] 矢作川古岸水辺公園（1996） 源兵衛川（1997） 精進川（1997） 和泉川（1997） 茂漁川（1998） 一乗谷川（1999） [木野部海岸（2004）]
景観法全面施行（2005）	多自然川づくり基本方針（2006）
遠賀川（2006） 北彩都旭川（忠別川、2014） 新川千本桜（2015）	黒目川（2007） 板櫃川水辺の楽校（2009） 野川再生（2010） 上西郷川（2013） 糸貫川（2015）

注：年は竣工年を示す。[]は河川事業以外。

あらゆる存在者は、わたしたちの関心と実践的なかわりによってはじめて、その実存的な姿を現すのだから。

「川の存在の真実」は、したがって、わたしたちのアクチュアルな生の諸局面と密接に連動した、ダイナミックなありかたとしてイメージされるべきものかもしれない。そのダイナミズムを捉えるためには、わたしたちがどのように実存としての川とかかわってきたか、という綿密な現象学的検証が、あらためて必要となる。

筆者は、「いまここに生きているわたしが他者や他の存在者とかかわる場」として「世界」をとらえる存在論の枠組みに、可能性と希望を見ている。世界を認識対象とみなす近代主観主義（主客二元論）における主体は、結局どこまでも各自的で孤立的である。現代における主体は、自己完結した主観としての認識（理性）に頼って生きるしかない状況にとじこめられ、その認識に頼れば頼るほど他者理解からとおざかります孤立してゆく、という負の循環のなかにあるように見える。身のまわりの世界を、認識対象ではなく生の実践の場としてとらえなおし、他者や存在者との関わりのなかでアクチュアルに生成する世界像としての風景を理論化しようとするとき、現代の（とくに多自然系の）水辺デザイン事例は、本質的な考察素材をゆたかに提供しているように思う。

参考文献

- 1) 渡邊二郎：芸術の哲学、p.369、ちくま学芸文庫、1998。
- 2) 本章の記述は以下の文献を参考にしている。岡田一天：河川環境整備の歴史、『都市の水辺をデザインする』所収、pp.214-226、彰国社、2005。小出ひかり：関連制度と設計思想からみた現代の水辺空間のデザインの展開、東京大学修士論文、2017。土木学会景観・デザイン委員会：土木学会デザイン賞作品選集、2001～2016。

(2017.?.?? 受付)